



图版1 元興元年(105)環狀乳神獸鏡(上)·黃武六年(227)重列式神獸鏡(下)



图版 2 「黄武元年」对置式神兽镜

## 紀年銘をもつ神獸鏡の新例

岡村 秀典

紀年鏡は前漢永始二年（前一五）方格規矩四神鏡を嚆矢として、後漢から西晋時代に盛行した。それは鏡の制作年代をピンポイントで示すことから、型式と様式にもとづく相對編年に実年代を与える指標として、早くから研究が進められてきた。また、三角縁神獸鏡をはじめとする三国時代の神獸鏡には、魏や呉の年号が銘文に記されているため、年代の指標となるだけでなく、三国鼎立の政治情勢を反映する考古資料としても注目されてきた。

かつてわたしは京都大学人文科学研究所の共同研究「中国古鏡の研究」班において前漢から西晋時代までの鏡銘を総合的に分析し、二〇〇九年よりその成果を『東方学報』に発表してきた。紀年鏡銘については「漢三国西晋紀年鏡銘集釈」（『東方学報』京都第八七冊、二〇一二年。以下「集釈」という）をまとめ、神獸鏡を中心

とする私論「漢三国西晋紀年鏡―作鏡者からみた神獸鏡の系譜」（同第八八冊、二〇一三年。以下「前稿」という）を発表した。

二〇一六年三月、わたしは「中国南北朝時代の仏教文化とその源流にかんする考古学的研究」を課題とするJSPS科学研究費（基盤B、課題番号二四四〇一〇三三）により、江南の杭州・宜興・紹興を旅した。そのとき調査した漢・六朝鏡のうち、集釈未収録の紀年銘をもつ神獸鏡の三面をここに紹介し、その歴史的意義について考察する。調査には本学文学研究科修士課程二回生の馬淵一輝が随行し、浙江省文物鑑定審核弁公室の王牧氏、中国文物学会青銅器專業委員會の孔震・張毅明・徐俊傑・馬少春・唐勤彪・張宏林氏、紹興越国文化博物館の孫海芳館長に多大の便宜をいただいた。各位に深く感謝する。

一 元興元年（二〇五）環状乳神獸鏡

神獸鏡とは、内区の主紋に神仙と靈獸を浮彫であらわした鏡をいう。その中で最初に出現したのが、環状乳神獸鏡である。後ろを振り向く獸の背中に神仙が坐り、獸の肩と腰には白状に突起した環状乳がある。最古の作例は元興元年（二〇五）三神三獸鏡で、これまで知られていたのは錢站『浣花拜石軒鏡銘集録』（二七九七年）に模本、端方『陶齋吉金録』（二九〇四年）や羅振玉『古鏡圖錄』（二九一六年）などに拓影が掲載されている同年五月丙午日鏡（以下「丙午鏡」という）である。いま五島美術館に所蔵する踏み返し鏡は、径八・九センチと小さい（図1右）。

ここに紹介するのは江蘇省宜興市の張毅明氏が所蔵する元興元年五月二十日甲午鏡（以下「廿日鏡」という）である（図版1上）。径一一・七センチ、重さ一九六グラム、全体に黒漆色を呈し、その色調から江南の出土と思われる。

内区の一部に鋳あがりの不鮮明なところがあるものの、圖像紋様や銘文は明瞭に観察でき、拓本や踏み返し鏡しか知られていない丙午鏡より資料的価値は高い。

西王母は双髻冠をいただき、両肩から気が生じ、左右の環状乳には禽獸が外向きにあらわされている。東王公は三山冠をかぶり、

西王母と同じ坐勢である。しかし、左の環状乳には獸、右の環状乳にはうなだれて袖で涙を拭く鍾子期があらわされている。知音の故事で知られるように、鍾子期は伯牙にともなうべきであるから、本鏡の配置はまちがっている。伯牙は両袖をまくりあげて膝にのせた琴を弾いている。左の環状乳には鳥、右の環状乳には羽人が伺候している。

獸は三体とも天の柱である巨（維剛）を口に銜え、一体は側視形、二体は斜視形にあらわされる。環状乳の配置は不均等で、神像の間は獸形の間よりやや広くなっている。

内区外周には半円方形帯がある。半円と方格が二個ずつあり、半円には渦紋、方格には一字ずつ銘文がある。渦の数は丙午鏡と同じ五渦だが、丙午鏡の半円と方格は九個ずつである。本鏡の方格銘は西王母の右下から時計回りに読む。

吾作明鏡、吾れ明鏡を作るに、

幽涑三商。三商を幽練せり。

位至三公。位は三公に至らん。

整った四言句で、「商」「公」が叶韻する。第二句の「商」は五行で金をあらわし、「三商」は三つの金属、すなわち青銅鏡の主要な原料を指す [Karlgren 1934: 176]。

外区には銘帯と渦紋帯がめぐっている。銘文は西王母の下方に

起句記号の「…」があり、時計回りにめぐる。隸書体ふうの直線的な字画であり、丙午鏡の字形に近似する。

元興元年、  
元興元年、

五月廿日甲午、  
五月二十日甲午、

天大赦、  
天の大きいに赤するとき、

廣漢西蜀、  
広漢西蜀にて、

造作明竟、  
明鏡を造作するに、

幽三商。  
三商を幽（鍊）せり。

周徳無亟、  
彫刻すること極まりなく、

廿徳光明。  
世よ光明を得ん。

長樂未、  
長き樂しみ未だ（央あききず）、

宜侯王。  
侯王に宜し。

富且昌。  
富み且つ昌まかえん。

師命長。  
師の命は長からん。

位至三公兮。  
位は三公に至らん。

「商」「明」「王」「昌」「長」「公」が押韻する。第六句の「凍」と第九句の「央」が脱落している。

集釈に論じたように、「元興」は和帝の年号で、和帝は章和二年（八八）に一〇歳で即位し、元興元年十二月に二七歳で崩じた。

『後漢書』和帝紀には「夏四月庚午、大赦天下、改元元興」とあ

り、本鏡は改元の翌月に制作されたものである。しかし、陳垣『二十史朔閏表』によれば、五月朔日は癸丑で、二十日は壬申であるから、「五月廿日甲午」は虚辞である。同じように「五月丙午」も虚辞である。ただし、重慶市巴県沙坪壩の石棺墓から出土した八鳳鏡（常任俠一九三八）には「元興元年五月壬午」とあり、これは実暦で五月三十日にあたる。このように「元興元年五月」鏡の干支には「丙午」・「甲午」・「壬午」があり、いずれも南の「午」が選択されている。また、光武英雄（二〇〇六）が指摘するように、「天大赦」は「天下に大赦する」意味ではなく、「赦」は「赤」や「灼」と通じて火が燃えさかるさまをあらわす。すなわち、本鏡が夏五月の太陽が南中してきらきらと照りつける灼熱の日時に鑄造されたことをいう。

前稿に論じたように、「広漢西蜀」は四川盆地の広漢郡に所在した工房名である。丙午鏡では「広漢造作、尚方明竟」とあり、「西蜀」が省略されて「尚方」が加えられている。河南省南陽市出土と伝える「元興元年五月丙午日」神獸鏡（崔慶明ほか一九八四）では「広漢西蜀造作、尚方明竟」とあり、いずれの鏡も宮廷御用器を制作する中央の「尚方」に納入するため「広漢西蜀」工房で制作されたものだろう。

「周徳無亟」の「周」は「雕（彫）」の仮借。おそらく「徳」

は「刻」の誤記であり、圖像紋様を余すところなく彫刻したという常用句であろう。「世徳光明」の「徳」は「得」の仮借で、ひそかに三種の金属を精錬した前句の結果、本鏡は永遠に光り輝くという意味である。ここまでが鏡の特質について記した句で、以下は服鏡者に予言する鏡の効能である。

「長楽未」は韻字の「央」が脱落している。以下の三言三句は吉祥句の羅列で、毎句押韻している。「師命長」は元興元年鏡にはじめて出現した語で、四言では「其師命長」とされ、銘文の末尾に置かれることが多い。「師」は作鏡者の尊称として用いられたほか、太平道や五斗米道（天師道）など初期道教の指導者を指すこともあり、「命」は「いのち」の意味であろう。かれら道士たちが後漢代の墓券や鎮墓文に用いた「急如律令（急なること律令の如くせよ）」のように、これは広漢派の鏡工が呪文の一種として銘文に用いた可能性があるであろう。

以上のように廿日鏡の銘文は、語句や字形が丙午鏡と類似している。しかし、脱字二か所と誤字一か所あり、一か所の脱字にとどまっている丙午鏡よりも草卒のきらいがある。

紀年銘をもつ環状乳神獸鏡は、元興元年（二〇五）に出現した後、半世紀あまり形跡がなく、延熹二年（二五九）にふたたびあらわれる。延熹二年鏡は二種あり、一例は泉屋博古館蔵（河南省

唐河県から同型鏡が出土）の五月丙午鏡（以下「五月鏡」という）で、径一一・五センチ、三六五グラム、もう一例は京都国立博物館新収の正月丙午鏡（以下「正月鏡」という）で、径一二・一センチ、四六六グラム、両鏡とも元興元年鏡と同じ「広漢西蜀」の制作を銘記する。五月鏡の銘文は元興元年鏡に類似するが、正月鏡の銘文は「広漢西蜀」鏡の中ではやや異例である。それは稿を改めて検討するとして、ここでは圖像紋様を比較してみよう。

内区主紋はいずれも三神三獸の構成である。しかし、正月鏡は西王母・東王公・伯牙の判別がむずかしく、正月鏡と五月鏡には鍾子期らしい圖像はみあたらない。正月鏡の獸は三体ともほぼ同形である。正月鏡の鈕には浮彫の龍紋があらわれている。このような龍紋鈕は一五六年から一八一年まで広漢派の八鳳鏡・獸首鏡・環状乳神獸鏡に確認されている（原田三壽二〇〇五）。また、延熹二年鏡では二種とも外区外圍が菱雲紋となり、半円方形帯の半円が無紋となっている。

このように元興元年鏡と延熹二年鏡とは、五〇年あまり隔たっているにもかかわらず、同じ「広漢西蜀」の制作ということもあって、その差異は小さい。圖像紋様と銘文の全体をみれば、延熹二年の五月鏡と正月鏡との差異の方がむしろ大きいように思われ、型式論にもとづく編年のむずかしさを痛感する。



図1 元興元年（105）環状乳神獸鏡  
左：廿日鏡（張毅明氏蔵，岡村写真），右：丙午鏡（五島美術館蔵，岡村写真）



図2 延熹二年（159）環状乳神獸鏡  
左：五月鏡（泉屋博古館蔵，岡村写真），右：正月鏡（京都国立博物館蔵，岡村写真）

紀年銘をもつ神獸鏡や獸首鏡は一五〇〜一八〇年代に盛行するが、それより五〇年あまりさかのぼる元興元年に数面の紀年鏡が孤立しているのはなぜだろうか。元興元年を追頌するため、後代にそれを制作した可能性はないのだろうか。

上述のように元興は和帝の年号で、四月に改元し、同年十二月に和帝は崩じたから、一年に満たない元興元年に追頌すべき事情はとくにみあたらない。植山満照(二〇〇二)の整理によれば、九七年ごろ宦官の蔡倫が尚方令に就き、元興元年(二〇五)に造紙術を和帝に奏上して賞賛され、その一方で和帝崩御の翌年に鄧皇太后が、太官・尚方・内署で制作する奢侈品のほか、蜀郡や広漢郡の鉦器・九帯佩刀などを禁止する儉約令を出している。

古代から中世への転換の中で、手工業の生産体制は変革をせまられていた。和帝は塩や鉄のような生活必需品ですら専売制度を廃止し、民間にその生産をゆだねて税金を徴集する方式に切り替えた。明帝のころ、方格規矩四神鏡を独占的に制作していた「尚方」から個人工房が相次いで自立していった(岡村秀典二〇一〇)。この中で広漢郡に設置されていた工官が「広漢西蜀」として民営化された可能性はあるものの、それが元興元年の大事であったという証拠はない。したがって、元興元年鏡はいずれも紀年の示す一〇五年に制作されたと考えるべきであろう。

## 二 黄武六年(二二七)重列式神獸鏡

ここに紹介するのは江蘇省宜興市の徐俊傑氏が所蔵する黄武六年(二二七)重列式神獸鏡である(図版1下)。宜興で中国文物学会青銅器專業委員会が開かれたときの図録(宜興市文物管理委員会 弁公室編二〇一三:一四三)に発表され(以下「図録」という)、径一三・三センチ、重さ三三七グラム、地金はぶい銀黒色を呈し、鏡面から背面の一部に淡緑色の錆がある。

重列式神獸鏡とは、内区を水平に数段に区分し、各段に神像をすべて上向きに並べた鏡である。建安元年(一九六)に「示氏」が創作した重列式神獸鏡は、「五帝・天皇」と「伯牙・黄帝」を主たる神像とした。これに対して「張氏元公」らは、西王母と東王公、青龍・白虎・朱雀・玄武の四神を加えたところに特徴がある。前稿に論じたように、三世紀に活躍する会稽派の鏡工は、もっぱら後者の図像を模倣しており、本鏡もその一例である。

本鏡は内区を五段に分け、中段に華蓋をいたたく西王母と東王公を配している。二神とも三山冠をかぶり、龍虎座の外側だけが表現されている。内区の左右両端には青龍と白虎が二段にわたって大きくあらわされている。外区には銘帯と渦紋帯があり、銘文は時計盤で七時の位置から反時計回りにめぐっている。



黄武六年、

五月壬子四日癸丑、

造作三、

命之宜王且侯、

服竟之人皆壽歲、

子孫衆多、

悉爲公卿、

□□□□陳世□□、

□□□□大吉。

黄武六年、

五月壬子（朔）の四日癸丑に、

三を造作せり。

之れを命せば、王且つ侯に宜し。

鏡を服するの人は皆な壽歲ならん。

子孫衆多にして、

悉く公卿と為らん。

□□□□陳世□□、

□□□□大吉ならん。

「黄武」は呉王孫權が魏の黄初三年十月に改元した年号。黄武六

年五月朔日は乙未で、四日は戊戌であるから、「五月壬子（朔）

四日癸丑」は虚辞である。「六」年「五」月「四」日に「三」を

造作することは、六×五×四×三で一年の三六〇日であらわし、

陰極の「壬子」から「癸丑」へと移る干支の変化に陽氣がふたた

び生長する陰陽五行の循環を示したものと集釈は解釈した。

同じ黄武六年五月四日につくられた重列式神獸鏡が和泉市久保

惣記念美術館に所蔵されている（図3左）。圖像紋様は同鏡かと

みまがうほど類似するが、径一一・六センチ、本鏡より少し小さ

い。その銘文は第七行まで本鏡と同文であり、以下は、

收財數百牛羊、而□□□□。

と読まれている。

本鏡の第八行以下は鏽のため図録では釈読していないが、「陳

世」と末尾の「大吉」は判読できる。「陳世」は二二〇年代後半

に活動した会稽派の鏡工であり、その作品として黄武七年鏡と黄

龍元年鏡が知られている（王仲殊一九八六）。しかし、会稽派の鏡

は、銘文の冒頭に制作の時間をおき、つづいて作鏡者の名を記す

のがふつうであり、本鏡のように銘末の近くに名を入れることは

ない。しかも久保惣藏鏡を参考にすれば、「陳世」の前三字は

「收數□」のようにみえ、その釈字に疑問がないわけではない。

そこで「陳世」作の紀年鏡を総ざらいしてみよう。五島美術館

に所蔵する黄武七年（二二八）鏡（図3右）は、径九・八センチ、

重さ一六五グラム、半円方形帯を省略した特異な対置式神獸鏡で

ある。西王母と東王公の表現には区別がなく、副神は琴を膝にの

せる伯牙らしい圖像があるほかは、ほとんど同じ表現であり、図

像比定がむずかしい。鈕座には半円を並べ、外区への斜面には粗

い鋸歯紋を配している。外区の渦紋帯は黄武六年鏡と同じで、銘

文は西王母の外方から時計回りにめぐっている。

黄武七年、

七月戊午朔七日甲子、

紀王治時、

黄武七年、

七月戊午朔の七日甲子は、

治を主る時を紀したり。

大師陳世嚴作明鏡、

大師陳世嚴（とく）んで明鏡を作れり。

服者立至公。

服する者は、位公に至らん。

年月日のそれぞれに陽数の「七」を重ね、暦日のはじまる「甲子」をとくに選んで制作したものが、実暦である。前鏡が年月日の六×五×四に「三」をかけて一年の三六〇日としたように、作鏡者の「陳世」は紀年銘に独自の術数論を展開したのである。

黄龍元年（二二九）七月十三日「陳世」重列式神獸鏡には三種四面がある。表向きは同日に同一の鏡工によって制作されたことから、三種とも画像紋様はほとんど同じで、二年前の黄武六年鏡とも近似している。

和泉市久保惣記念美術館所蔵の黄龍元年「陳世」鏡（図4左）は、径一一・九センチ、重さ二四三グラム。外区の銘文は時計盤で十一時の位置から反時計回りにめぐっている。

黄龍元年太歳在丁酉、

黄龍元年太歳は丁酉に在り。

七月壬子朔十三日甲子、

七月壬子朔の十三日甲子に、

師陳世造作、

師陳世の造作するに、

三沫明鏡、

三たび鍍りたる明鏡なり。

其有服者、

其れ服する者有らば、

久富貴、

久しく富貴にして、

宜□□□□□。

宜□□□□□。

黄武八年（二二九）四月に孫権は都の武昌で帝を称し、黄龍と改元した。「太歳」は二年で天を一周する木星にちなむ名で、黄龍元年は己酉であるから、「丁酉」は虚辞である。しかし、「七月壬子朔十三日甲子」は実暦である。

五島美術館にも同年の「陳世」鏡があり、径一一・六センチ、重さ二二四グラム、銘文はほとんど同じだが、末尾は、

其有服者、命久富貴、宜□□□。

という四言三句になっている。

もう一種の黄龍元年「陳世」鏡（図4右）は、湖北省鄂州市水泥廠の出土で、径一一・〇センチ（鄂州市博物館二〇〇二・一八三）、一部欠損しているが、重さ二四二グラム、同型鏡が広西壮族自治区貴港市から出土している（広西壮族自治区博物館二〇〇四・図九）。外区の銘文は時計盤で二時の位置から時計回りに展開し、「命久富貴」で銘文が終わっている。

このように三種四面の黄龍元年七月十三日「陳世」重列式神獸鏡は、銘末に多少の長短があるものの、径は一一・六～一二・〇センチと近似し、画像紋様もほとんど同じである。

ここで改めて「陳世」作と考えられる黄武六年鏡と黄龍元年鏡の画像を比較するため、図5には重列式神獸鏡の下二段を示した。1は本稿で紹介した黄武六年鏡、2と3は和泉市久保惣記念美術



図3 黄武六年（227）重列式神獸鏡（左）と黄武七年（228）対置式神獸鏡（右）  
左：久保惣記念美術館蔵（岡村写真），右：五島美術館蔵（岡村写真）



図4 黄龍元年（229）重列式神獸鏡  
左：久保惣記念美術館蔵（岡村写真），右：鄂州水泥廠出土〔鄂州市博物館2002：183〕

館の所蔵で、2は作者不明の黄武六年鏡、3は黄龍元年「陳世」鏡である。圖像構成はほとんど同じだが、1と2には上段の左右の双獸間に羽人が外を向いて立つのに対して、3ではそれが省略されている。圖像表現は1がもつとも精細であり、2はそれに準じるが、3は鑄あがりが悪いこともあって、やや粗雑である。こうした細微な差異はあるものの、圖像からみても、すべて「陳世」による同巧の重列式神獸鏡と考えてまちがいない。

以上のように「陳世」は黄武六年から黄龍元年まで三年間にわたって、五種の重列式神獸鏡のほか、黄武七年には対置式神獸鏡も制作していたことが明らかになった。すぐれた鏡工は、芸術作品としての鏡制作をこころざし、同じ会稽派の「蔭豫」は二二七年の重列式神獸鏡と二二一年の同向式神獸鏡の二種が知られている。一八〇年代にさかのぼると、呉派の「張氏元公」は環状乳神獸鏡を手はじめとして、それを改変して各種の同向式神獸鏡を製作し、最後には重列式神獸鏡を創作した。かれらはまた、銘文にも獨創性を發揮したのである〔岡村秀典二〇一三〕。

しかし、これまでの考古学は、まず圖像紋様をもとに環状乳、同向式、重列式、対置式神獸鏡に分類し、鏡種ごとに縦割りの編年を組み立ててきた。銘文もパターンをもとに分類し、作鏡者に注意をはらうことなく、銘文を読むこともなかった。いわば「形

だけを見て、人をみない」機械的な型式分類に終始し、鏡背という小さなカンパスに自我を表現しようとした「陳世」や「蔭豫」らの芸術に思い至ることがなかったのである。

また、紀年鏡で確認できる鏡工の活動期間は、「陳世」は三年、「蔭豫」は五年であり、後漢の建安年間に重列式神獸鏡を制作した「示氏」は一〇年である。かれらは自立した芸術活動を展開していたゆえに、活躍した期間は意外にも短かったのである。

今回の調査旅行中、わたしは浙江省文物考古研究所で「東漢鏡工伝―芸術家的出現」と題する講演をおこなった。そこで主に論じたのは一世紀後半の「青蓋」や「杜氏」ら淮派の鏡工とその作品であったが、講演後の質疑の中で、ある研究者が「古代の工人は身分が低く、かれらは官営工房に隸属していたはずだ」と主張した。その根拠は不明だが、かつて三宅米吉（二八九七）が銘文は「大抵無学の工人が時に随て定文句を綴り合せたるものなるべし」と断じたように、それは多くの考古学者がいただいている鏡工のイメージであろう。その身分が高いか低いかは、いま問わないとしても、「陳世」や「蔭豫」ら卓越した鏡工たちは、技術力だけでなく、すぐれた作文能力を有し、術数論に長け、精神の自由を求めて活動していたことはまちがいないだろう。わたしたちはその精神を正しく評価することに努めなければならない。



図5 重列式神獸鏡の圖像比較

1：黄武六年鏡（徐俊傑氏藏，岡村写真），2：黄武六年鏡（和泉市久保惣記念美術館藏，岡村写真），3：黄龍元年鏡（同左）

### 三 「黄武元年」対置式神獸鏡

二二〇年正月に曹操が没し、同年十月、子の曹丕は漢獻帝から帝位を禪讓されて魏を建国し、黄初と改元した。その前年に長江中流域の荊州をめぐる孫權と劉備との同盟関係が破綻したことから、孫權は魏帝に臣従の使いを送り、翌年十一月に呉王に封じられた。しかし、翌二二二二年に魏と呉との関係が悪化したため、群臣が孫權に即位を勧めたものの、孫權は黄武という元号を定めただけで、帝位に即くことはなかった。漢から禪讓された魏の曹丕や、漢の復興を大義名分とする蜀の劉備に対して、呉の孫權には帝位につく正統性の根拠が乏しかったからである。二二九年四月、黄龍と鳳凰が出現したという報告をうけ、孫權はようやく即位し、黄龍と改元したのである。

ここに紹介するのは浙江省杭州市の孔震氏が所蔵する「黄武元年」対置式神獸鏡である（図版2）。径一四・〇センチ、重さ三三六グラム、地金はにぶい銀黒色を呈し、鍔あたりは良くない。

対置式神獸鏡とは、黄武七年「陳世」鏡で一瞥したが、鈕を挟んで主神の西王母と東王公が対置され、二神の左右には獸が対向し、各獸の後ろには神が副次的に配された鏡である。本鏡の図像は、西王母と東王公との区別がつかないほど崩れているが、二神

ともいわれる龍虎座に坐っている。副神は伯牙と鍾子期、および黄帝と人頭鳥身の神の組み合わせである。鈕は大きく扁平で、中心が臍状にやや突起し、鈕座は整っていない。半円方形帯には半円と方格を九個ずつ配し、間を円紋と小さな珠点でうめている。半円の内外には夔手状の紋様、方格には「士三公九卿十二大夫」の銘文を一字ずつ入れている。永安元年（二五八）鏡など呉後期には「人吏三公九卿十二大夫（人吏ならば、三公・九卿・十二大夫とならん）」という一〇字の方格銘が多く、ここでは「人吏」のかわりに「士」を用いている。「士」は「仕」の省字である。一段高くなった外区には銘帯と菱雲紋帯を配し、銘文はおおらかな字形で、鍾子期の外方から時計回りにめぐっている。

黄武元年、

王道太平。

五月丙午、

時加日中、

制作百鍊之鏡、

清且明。

服者位至侯王。

保子孫、

壽萬年祥吉。

黄武元年、

王道太平なり。

五月丙午の、

時は日の中ちゆうするにあ加たりて、

百鍊の鏡を制作するに、

清にして且つ明なり。

服する者は位侯王に至らん。

子孫を保ち、

寿は万年にして祥吉ならん。

第四句までは整った四言で、第五句以下は雜言体である。

図6左には劉体智旧蔵の「黃武元年」對置式神獸鏡〔梅原末治一九四二・異一〕を示した。径二二・三センチ、拓本のため圖像の細部は不明だが、同年の作だけに神獸像の表現は本鏡に近似している。異なるのは半円方形帯が半円と方格だけになり、外区外圍が無紋に簡略化していることぐらいである。方格の銘文を劉体智〔一九三四・二・七三〕は「直三公〇三十二大夫」と読むが、本鏡の「士三公九卿十二大夫」に類似する句であろう。外区の銘文は、梅原の釈文を参考に、次のように読むことができる。

黃武元年、大歳在□□、  
□□□□、□□□日中。

制作百涑明竟、清□且富、

服者萬年、宜侯王。

立至三公。及古。

第二行について王仲殊（一九八七）は、建興二年（二五三）鏡・太平原年（二五六）鏡・宝鼎三年（二六六）鏡などの銘文を参考に「五月丙午、時加日中」と復元した。それは本鏡によって補強できる。「時加日中」は太陽の南中する時間にあたるという意味である。梅原は「制作」で句を切るが、つづく「百涑明竟」は「制作」の目的語であり、本鏡では「制作百涑之竟、清且明」となっ

ている。このような類似性からみて、二面の「黃武元年」鏡は同時期の作と考えてよいだろう。

ところが、この「黃武元年」鏡は、前節にみた黃武六年「陳世」鏡と比べると、同じ「黃武」年の制作であるにもかかわらず、圖像紋様と銘文のちがいは大きい。

そこで「黃武元年」鏡と同じ對置式神獸鏡の例として、図6右に五島美術館所蔵の建安二十四年（二一九）鏡を示した。圖像紋様はやや精細で、西王母と東王公の両肩からたちのぼる気が厥手状をなし、龍虎座が小さくあらわされているというちがいがあるものの、全体として差異は小さい。ところが銘文は「黃武元年」鏡と大きく異なっている。

建安廿四年五月丁巳朔卅日丙午造作明竟、既清且良巧、

牛羊有千、家財三億、宜侯王、位至三公、長生□□□。

鑄造の月朔と制作日それぞれの干支を記すことは、「陳世」や「蔭豫」ら会稽派の鏡に特徴的であり、「五月丙午、時加日中」という定型句を用いた「黃武元年」鏡とのちがいは明らかである。結論からいえば、「黃武元年」鏡は二二二年の作ではなく、呉の末期に建國を追頌して制作した擬古鏡と考えるのが妥当であろう。その手がかりになるのが「嘉興元年」鏡（図7左）である。王仲殊（一九九五）は、史書に伝える呉の年号に「嘉興」はない

が、銘文と図像紋様が次にみる「黄龍元年」鏡と類似していることから、それは呉鏡であり、孫権の孫の孫皓が帝位に即いた元興元年（二六四）、亡父の孫和に文皇帝を追諡したとき、孫和のために宮衛が置かれた嘉禾六年（二三七）を「嘉興元年」と追改し、その紀年をいれた鏡を制作させたとする。嘉禾を「嘉興」に改めたのは「和」と同音の「禾」を避けたからである。別の「嘉興元年」鏡に「嘉興元年、大歳在丁巳」とあり、この「丁巳」はちょうど嘉禾六年にあたっている。これをうけて菊地大（二〇〇二）は、孫皓が父孫和の宗廟祭祀を整えた宝鼎元年（二六六）に「嘉興元年」鏡の制作を考える。それは武昌に遷都した翌年のことであり、その鏡が鄂州市で発見されたことから、武昌で制作されたと菊地は推測するのである。その銘文は次のようにいう。

嘉興元年、

歳在大陽。

乾〰合化、

王道始平。

五月丙午、

時加日中。

制作竟、

百漑清銅。

嘉興元年、

歳は太陽に在り。

乾坤化を合し、

王道始めて平らかなり。

五月丙午の、

時は日の中するに加たりて、

（明）鏡を制作するに、

清銅を百漑せり。

服者萬年、 服する者は万年となり、

位至侯王。 位は侯王に至らん。

辟不羊。 不祥を辟しりぞけん。

方格銘は「吏三公九卿十二〇大夫」と読める。この「嘉興元年」鏡に類似するのが「黄龍元年」鏡（図7右）であり、湖北省鄂州市西山水泥廠七九号墓出土例（鄂州市博物館二〇〇二・一八四）の外区の銘文は、「嘉興元年」鏡に類似し、次のようにいう。

黄龍元年、大歳在丁巳、

乾〰合化、帝道始平。

五月丙午、時茄日中。

造作明竟、百漑清銅。

服者萬年、位至三公。

辟除不祥。

方格銘は判然としないが、台湾・莊靜芬氏蔵の同型鏡は「人吏三〇〇卿十二大夫」と釈読できる。このように「嘉興元年」鏡と「黄龍元年」鏡とは、外区の銘文と方格銘ともによく似ている。とくに黄龍元年の歳在は己酉であるから、その「大歳在丁巳」は虚辞であるが、「嘉興元年」鏡の銘文にも「大歳在丁巳」が用いられていることからすれば、「黄龍元年」鏡は「嘉興元年」鏡と同じ孫皓代の制作であった可能性が高い。



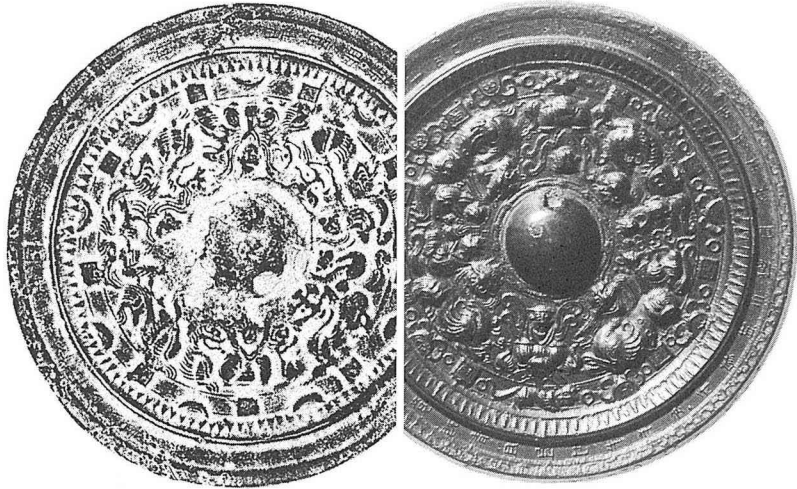


図6 「黄武元年」鏡（左）と建安二十四年（219）鏡（右）  
左：劉体智旧蔵〔梅原末治1942：呉1〕，右：五島美術館蔵（岡村写真）



図7 「嘉興元年」鏡（左）と「黄龍元年」鏡（右）  
左：早稲田大学會津八一記念博物館蔵（岡村写真），右：湖北省鄂州市西山水泥廠79号墓出土  
〔鄂州市博物館2002：184〕

「嘉興元年」鏡の「乾合化、王道始平」と「黃龍元年」鏡の「乾合化、帝道始平」とは、呉の建国によって天地陰陽の気が統合され、理想的な帝王の政治が開かれたことを宣揚した語である。典雅で莊重な四言体を用いて孫権の帝業をたたえ、天命をもとに呉政権の正統性を唱えている。こうした祝詞は、すでに北京市徴集の太平元年（二五〇）對置式神獸鏡（程長新ほか一九八九：図版三六）の銘文にあらわれている。

君作、君作るに、

太平元年、太平元年、

五月丙午、五月丙午の、

時茄日中。時は日の中するに加たる。

乾合化、乾坤化を合わせ、

帝道始興。帝道始めて興る。

造作明竟、明鏡を造作するに、

百鍊正銅。正銅を百鍊せり。

上應星宿、かみは星宿に応じ、

下辟不祥。下は不祥を辟く。

服者老壽、服する者は老寿にして、

長樂未央。長き樂しみ未だ央まざる。

三公九卿、三公・九卿となり、

五馬千羊。五ひきの馬と千ひきの羊あらん。

二五二年、半世紀にわたって君臨してきた孫権が崩じ、末子の孫亮が一一歳で即位すると、政権はにわかには不安定となる。孫亮は二五六年正月に孫権をまつる太祖廟を建造して政権の正統性を宣揚し、同年一〇月に「太平」と改元した。このため本鏡の「五月丙午」は虚辞である。文頭の「君作」は異例で、「吾作」とするべきところを書き誤ったのかもしれない。しかし、この情勢からみると、「君」とは呉帝の孫亮であり、孫権の偉業を「乾合化、帝道始興」と顕彰した本鏡は、太祖廟の建設と一連の国家事業として制作され、同時に太祖孫権をたたえる「黃武元年」鏡と「黃龍元年」鏡が制作された可能性があろう。

朝廷内のはげしい実権争いの末、孫亮は二五八年に退位をせまられた。代わって即位した孫休も二六四年に崩じ、孫皓が即位したのである。孫皓は皇太子の座を追われて自害させられた孫和の子で、孫皓即位の前年に魏は蜀を滅ぼし、即位の翌年には魏が滅んで西晋が成立しており、呉をめぐる内外の情勢は風雲急を告げていた。孫皓が孫和を顕彰し、みずからの正統性を宣揚することが喫緊の課題であった。この中で「太平元年」鏡の先例にならって「嘉興元年」鏡が創作され、合わせて孫権をたたえる「黃武元年」鏡と「黃龍元年」鏡が制作された可能性もあろう。

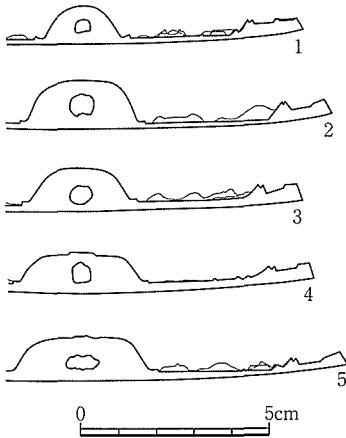


図8 断面図（縮尺1/2）

- 1：元興元年（105）鏡，2：黄武六年（227）鏡，3：黄龍元年（229）鏡，4：永安元年（258）鏡，5：「黄武元年」鏡（1・2・5：馬淵一輝，3：岡村，4：森下章司実測，1-5：馬淵製図）

このような追頌鏡は、四言を主とする銘文のパターンだけでなく、図像紋様も相互に類似している。図7の「黄龍元年」鏡と「嘉興元年」鏡とは、図像紋様が相互に酷似するだけでなく、図版2の「黄武元年」鏡や図6右の建安二十四年鏡にも類似している。とりわけ半円方形帯の半円に蕨手状の紋様をほどこす手法は、いずれの鏡にも共通している。このため前稿では「黄武元年」や「黄龍元年」の追頌鏡は、呉後期の制作時に流行していた図像紋様ではなく、呉初期の様式を擬古的に採り入れたと考えた。

ただし、細部においては時代の制約をうけている。ここでは鈕の形と大きさに着目してみよう（図8）。本稿でとりあげた三面は、1の元興元年（二〇五）環状乳神獸鏡、2の黄武六年（二二

七）「陳世」重列式神獸鏡、5の「黄武元年」対置式神獸鏡である。また参考資料として、3の和泉市久保物記念美術館蔵の黄龍元年（二二九）「陳世」重列式神獸鏡、4の五島美術館蔵の永安元年（二五八）対置式神獸鏡を例示した。1の鈕は、半球形で小さい。それに次ぐ2と3は、ともに「陳世」の作である。直径に比例して3より2の鈕がやや大きい、形は近似している。4と追頌鏡の5は鈕が大きく扁平で、とりわけ鈕の上に鑄造時の湯口らしい臍状の突起があることから、4と5の制作年代が近接していることがうかがえる。このように神獸鏡の鈕は、一〇五年、二二七〜二二九年、二五〇〜二六〇年代と、時代が下るにつれて形が大きくなっている。実測図が報告された鏡は多くないものの、鈕の大きさなら写真からでも計測できるため、銘文や図像紋様の分析と合わせて編年の一指標にすることができらるだろう。

### おわりに

神獸鏡は元興元年（二〇五）鏡を嚆矢として二八〇年代まで盛行した。紀年鏡の数も多く、四川の広漢派が環状乳神獸鏡を創作してからは、二世紀末から三世紀はじめに江南の「示氏」が重列式神獸鏡を制作し、会稽派の対置式・同向式・重列式神獸鏡に継承された。本稿で紹介した紀年鏡は、わずか三面にすぎないが、

次のような知見がえられた。

元興元年「広漢西蜀」鏡は、最初期の環状乳神獸鏡であり、同年の五月丙午鏡が拓本や踏み返し鏡しか知られていない現状において、貴重な資料になろう。黄武六年鏡は、今回の調査で「陳世」の作であることが判明したことにより、呉初期における会稽派の活動の一端が明らかになった。「黄武元年」鏡は、これまで劉休智旧蔵鏡の拓本しか知られていなかったが、今回調査した鏡は「嘉興元年」鏡や「黄龍元年」鏡と類似し、呉後期の政権が太祖孫権の建国を追頌して制作した可能性がいっそう高まった。

以上三面の紀年鏡は、すべて個人コレクションである。すなわち、盗掘された鏡が美術品として売買されたもので、出土地はもとより、そのコンテキストはまったくわからないから、考古資料としての学術的価値は低いとみなされる。しかし、中国では考古学者によって発掘された神獸鏡は少なく、出土地がわかっても、そのコンテキストが報告された例はほとんどない。

近年、洛陽で三角縁神獸鏡が出土したという報告（王趁意二〇一四）があり、日本のマスコミが沸き立った（朝日新聞二〇一五年三月二日朝刊）。日本の古墳から出土する三角縁神獸鏡には、「景初」「正始」という魏の年号や「洛陽」「徐州」という地名が銘文に記されているが、中国から一面も出土していないため、そ

の制作地をめぐる魏鏡説と日本製説とが対立していた。そこに魏の都が所在した洛陽で三角縁神獸鏡が「発見」されたことから、大騒ぎになったのである。しかし、実のところ、それは洛陽の骨董市場で入手されたコレクション資料であり、洛陽の出土という確実な証拠は示されていない。また、今回の調査では、弥生時代に北部九州で制作された（と考えられる）中広形銅矛（全長八四・五センチ）を宜興で実見した。それを所蔵する馬少春氏は、春秋戦国時代の越国の銅矛だと語っていたが、近年の「爆買い」で日本から流出した可能性が高いとわたしは考えている。

本稿では出土にかんする考古学的な議論を避けた。真贋の問題は別として、鏡の図像紋様や銘文に限定するのであれば、コレクション資料でも考古学の発掘資料と同じ土俵で議論できるからである。宋代以来一〇〇〇年の間、金石学者や収蔵家たちが鏡研究をリードしてきたのもうなずける。

ひるがえってみると、今日の中国考古学は、鏡の出土情報からどれほど有益な研究を導きだしているのだろうか。コレクション資料の「発見」に右往左往することなく、対象とする資料の特性をみきわめ、研究を進めることを自戒したい。

参考文献

- 【日文】五十音順  
岡村秀典二〇一〇「漢鏡5期における淮派の成立」『東方学報』京都第八五冊  
岡村秀典二〇一三「漢三国西晋紀年鏡——作鏡者からみた神獸鏡の系譜」『東方学報』京都第八八冊  
菊地大二〇〇二「三国呉の『嘉興元年』鏡についての一試論」『明大アジア史論集』第七号  
「中国古鏡の研究」班二〇二二「漢三国西晋紀年鏡銘集釈」『東方学報』京都第八七冊  
榎山満照二〇〇二「四川製作の後漢元興元年銘鏡について」『美術史研究』第四〇冊  
原田三寿二〇〇五「鈕文様を持つ鏡について」『立命館大学考古学論集』IV  
光武英樹二〇〇六「所謂、卑弥呼の鏡とされる陳是紀年鏡銘文の釈読」(上)(下)『東アジアの古代文化』一二六・一二七号  
三宅米吉一八九七「古鏡」『考古学会雑誌』第一編第五号  
【中文】ピンイン順  
常任俠一九三八「巴県沙坪壩出土之石棺画像研究」『金陵学報』第八卷

第一・二期

- 程長新・程瑞秀一九八九「銅鏡鑑賞」、北京燕山出版社  
崔慶明・王振行一九八四「南陽出土元興元年銅鏡」『江漢考古』第三期  
鄂州市博物館二〇〇二「鄂州銅鏡」、中国文学出版社  
広西壮族自治区博物館編二〇〇四「广西銅鏡」、文物出版社  
劉体智一九三四「善齋吉金錄」鏡錄  
王趁意二〇一四「洛陽三角綠筭松紋神獸鏡初探」『中原文物』第六期  
王仲殊一九八六「吳鏡師陳世所作神獸鏡論考」『考古』第一二期  
王仲殊一九八七「黄初、黄武、黄龍、紀年鏡銘辭綜釈」『考古』第七期  
王仲殊一九九五「黄龍元年鏡与嘉興元年鏡銘辭考釈——試論嘉興元年鏡的年代及其制作地」『考古』第八期  
宜興市文物管理委员会弁公室編二〇一三「蓋賈神工 光耀耀漢——宜興民間收藏銅鏡精品集」、文物出版社  
【英文】  
Kargen, Bernhard 1934 Chinese Mirror Inscriptions, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 6  
(京都大学人文科学研究所教授)